

時代小説礼讃



秋山駿

時代小説礼讃



秋山駿

日本文芸社

© 1990 Shun Akiyama
Printed in Japan



秋山駿

時代小説礼讃

1990年12月15日第一刷印刷
1990年12月20日第一刷発行

発行者 兵頭武郎

発行所 株式会社 日本文芸社 〒101 東京都千代田区神田神保町1-8

電話 294-8931(営業) 294-8936(編集) 振替 東京8-73081

本文印刷所 図書印刷

カバー・表紙・扉印刷所 栗田印刷

製本所 大口製本

定価 1550 円 (本体1505円)

ISBN 4-537-04999-5 C 0095

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

時代小説礼讀・目次

I

時代小説について

II

時代小説よ、蘇れ

69

剣・この簡単な物

74

時代小説の役割

85

II

柴田錬三郎

剣の魅力と柴田錬三郎

94

『運命峠』

129

もう一人の復員者

135

『剣鬼』

145

魂の焰

152

五味康祐

『柳生宗矩と十兵衛』

172

嗤いつつ生きた人・五味康祐

179

坂口安吾

無邪気な戦士

186

『信長』

199

白井喬二

純粹なロマネスク

202

中里介山

三度目の『大菩薩峠』

216

津本陽

『柳生兵庫助』

222

藤沢周平

『蟬しぐれ』

226

『たそがれ清兵衛』

229

隆慶一郎

『時代小説の愉しみ』

234

『花と火の帝』

237

III

柴田錬三郎の世界 澤辺成徳・秋山駿

243

時代小説礼讃 桶谷秀昭・中野孝次・秋山駿

264

**

あとがき

295

初出一覧

298

裝幀菊地信義

時代小説礼讃

I

時代小説について

I 宮本武蔵と柳生武芸帳

私はいま時代小説について考えてみようとする。何故それが必要か。第一にこれは少年の日の読書の、私の最初の経験であった。この経験は私に、小説の魅力と小説への不信という、二つの性質を同時に明らかにしてくれた。以来私は経験のこの穴のなかにいる。あるときは小説を強く信頼し、あるときは強く嫌悪し、そして嫌悪が強大になると、小説を読むという行為の根本の疑わしさのようなものが現われてきて眼の前の壁となった。小説読者の多数は、いったいこの小説という経験を、自分の生活感情のどこに同化させ、あるいはどう孤立させているのか。

たとえば私はヴァレリーの『テスト氏』に熱中したことがある。この男は二十歳の私にとって、確かに悟性神話上の怪物であった。私は考えた。自分の内部にある様々の想像や希望や可

能と同じく、この人間は現実に生きられることが可能だ、少なくとも、作者の内部で現実に存在する確乎たる人間の形姿である、と。ところが、不信の眼をもって見れば、この男は生きた人間ではない。彼は、一つの小説のように描かれた、精神の宮本武蔵というような或る像にすぎない。それは現実の模範となるような内容と実質をもつものではない。それは或る人間の或る完全なデッサンではない、と。テスト氏は、いわば小説中の宮本武蔵である。私は彼等の姿に魅せられて読む。しかし読んだからといって、自分が剣の名手や悟性の剣客であるための、些細などんな方途が発見できるだろう。

小説が描く人間の、読者の経験に対する、そういうあいまいな性質なら、トルストイの『戦争と平和』を読んでも、吉川英治の『宮本武蔵』を読んでも、一向にその性質に変化はないのだ。私は少年の思考で、小説の描く武蔵やナポレオンに熱中しながら、その一方では、彼等が、本当の剣の達人であり戦争の天才として存在した人間に、少しも関係のないウソの人間ではないかと疑っていた。面白ければウソの人間でもよい。それが物語という小説の魅力の一性質ではないか。しかし、私の未熟で過度な性質は、この考え方に飽きたりなかった。よく意識された熱中とは、或る確実な経験の何かである。ウソの人間に熱中するということは、経験というものの根底に現われてくる人間の自然とは、深く反していることだ、と。

小説の描く人間がどうせウソなら、何故ナポレオンとか武蔵という、現実に生きた本当の人間が必要か。もしウソの人間なら、真面目に彼に熱中したり感動したりする必要があるのか。そしてたとえば『戦争と平和』のナポレオンとは誰か。小説上仮定されたナポレオン某か。ト

ルストイの分身か。ポナパルトという実物への天才的な判断の結果か。それらのどの側面で、この男の現実性の比重を測定すればいいのか。むろんまったく同様に小説の武蔵を問うことができる。

思えば、私が、時代小説という最初の経験のなかで面接していたものは、フィクションという小説固有の性質、あるいはその基本の一面である。魅惑され、かつ嫌悪しつづけたものは、この世界のフィクションという性質であった。そして時代小説ほど単純明快に、フィクションの世界を形成するものはない。その理解は複雑な小説論よりも、むしろ単純な常識に容易である。時代小説の或る魅力と或る不信を語れば、それは小説の根本の問題へと自ら連続してくるのだ。私は思考の網の低さをうれえない。

しかし、不信は語りやすいが、魅力の性質の方は語りにくい。ことに剣戟小説のように、登場人物の或る一瞬の単純な行動、それが面白いか面白くないかで、小説の魅力というものが定まってしまう、そういう世界の説明は困難だ。むしろばかばかしい。読者も面白いか面白くないか、剣の一閃のような趣味の判断のなかにいるのだから。だから面倒臭い小説論より自由な月旦が向く世界なのだ。とにかく、時代小説の魅力は端的で明快なものだ。それを語ることは楽しい。私はただ自分の趣味の低さに気をつければよい。

私は少年時に、吉川英治『宮本武蔵』に熱中した。熱中すれば、武蔵のような人間になりたえという意志は自然だ。私は木刀で、めったやたらに樹や石を叩き回りながら、この単純な行

為から、どんな精錬された修練の方向を見出すことが可能かと考えていた。疑問はいくらでも出てくる。しかし、解決しようとする判断の糸はすぐ跡絶えてしまう。そこで武蔵を再読する。また三読する。そのあげくに失望がやってきた。

吉川氏は、私のような少年のために小説を描いたのではない。普通のたとえば恋愛小説のように、大人の小説を描いたのである。つまり、どのようにして剣の上手になるのか、いかなる手段で自己の剣の低きを克服するのか、そんなことはどうでもいいのだ。なるほど、進歩の段階を示すいくつかの契機は描かれる。沢庵との出会い、幽閉の読書、遊女の教訓、茶人の悟得、開拓など。さらに数度の決闘と円明の開眼を加えてもよい。しかし、剣を直接の中心にして、或る程度からさらに一段上の或る程度へと移る、比較されたその差のようなものが示されるのは、柳生石舟斎の小枝の切り口の非凡に武蔵が驚嘆する、その一場面だけである。模倣の行為の有効性をたしかめる基準を求める、少年の未熟な思考にはこの小説は飽きたりなかった。私は苛々しながら自問した。氏は何を描いたのか。

あらわれるのは、一人の精神主義者である。もっと判然といえば、人間円熟というような道程において、少しも失敗しない有効な努力だけを重ねた、一箇の成功者の貌である。私はこの人間像に不信を感じた。少年の直截な感受性に映じた声にならぬ疑問を、いまは言うことができる。人間円熟という一つの理想と、それへ至るための結局は一つの成功者の道程としてあらわれてくる手段とは、深く相反するものではないか。一つの根本的なパラドックスではないか。氏の描いた、この武蔵という人間はひび割れている。その精神主義者の貌と、有効な努力だ